

「教育超格差大国」アメリカ

津山恵子 著

著者は、共同通信社に19年勤務し、2003年からニューヨーク特派員となり、その後2007年に独立し、現在はニューヨークを拠点に活動している。

本書の「はじめに」で、アメリカの教育について朝日新聞出版「AERA」の教育特集の取材の成果を基にして、多くの人々と接する中で肌で感じた「違い」や「格差」がどこから来ているのかを探るうち、教育レベルの差が、知や常識、意識の差にまでつながり、食など生活スタイルにも大きく影響していることに気づいたと述べている。

日本でも「格差」という言葉が当たり前に聞かれるが、この格差を跳ね返す国になるための教育システムの大切さが考察されている。

序章「親の所得が高学歴への切符」では、アメリカの「お受験」について、幼稚園入園前から高額な費用がかかる各種のプレスクールが紹介され、その後の熾烈な競争は名門大学に入るまで続くことが取材をもとに述べられている。

第1章「アメリカンドリームの終焉」では、現在のアメリカンドリームとは、「親より一段高いレベルの教育を受けること」が最初の一步であるが、「裕福な家庭に生まれ、親も通った保育料が高いプレスクールから有名大学に進み、医師、弁護士、金融マン、政治家になる」というのはアメリカンドリームにはあたらないとしている。ドリームどころか、大学を卒業しても見合った職に就けない不満から、ニューヨークで2011年9月に発生した若者による「オキュパイ・ウォール・ストリート（OWS）」のデモが紹介され、その要因として大学卒を必要とする仕事に比べ大卒者が多すぎ、労働市場の

実態に合っていないと指摘している。

ただし、名門大学の果たす役割は大切だとし、ハーバード大学の素晴らしさが紹介されている。しかし今のアメリカの教育システムは、多くの人々にとって、アメリカンドリームを実現してくれないとまとめている。

第2章 衝撃「貧困家庭の子どもは脳まで小さい」では、アメリカ最大の都市ニューヨークの病んだ教育システムが紹介されている。

ゴムの部屋（rubber room）は、薬物中毒などの問題教員を「監禁」するところだが、校長と折り合わない教師も送り込まれた事例も紹介されていた。また、ニューヨーク市教育局によると、高校の卒業生率は67.2%（2015）と低く、その人種別内訳では、アジア系82.5% 10,583人、白人80.1% 7,925人、アフリカ系61.7% 13,603人、ヒスパニック系60.4% 17,411人であり、ヒスパニック系の未卒業生数は白人の卒業生数を上回っており、人種間格差が教育格差を招いている。

特に貧困層の子どもの脳の表面積は、富裕層の子どもより小さいとする研究報告もある。

第3章 夢よふたたび「アメリカの対策は試金石になるか？」では、OECDがまとめた調査によると加盟国の70%が三歳児教育を実施しているのに、アメリカでは38%に留まり、教員の給与も大卒社員に比べ68%と低く、今後の全米での教育改善施策が紹介されている。

第4章 経済格差＝教育格差の「負の連鎖を断ち切れ！」では、フェイスブックの創業者のザッカーバーグ氏の業績を紹介し、「教育格差」は「知性格差」につながるとし、今こそ世界基準で通用する人材育成が必要としている。

我が国でも子どもの貧困対策が動き出しているが、ミシェル・オバマ大統領夫人の活動が紹介され、教育格差の解消の必要性を訴えている。

（扶桑社新書、226頁、760円＋税）（山下省蔵）